
はてなの恋愛哲学

墨風 澄春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はてなの恋愛哲学

【Nコード】

N0413R

【作者名】

墨風 澄春

【あらすじ】

春、である。

命が芽吹き、心地よい風が全てを包み込む。

そして、新学期という鼓動高鳴り心躍るイベントを控えた、そんな季節。

「はてなちゃん！ 好きだっ！ 付き合って！」

僕はクラスメイトの結原果菜……通称はてなちゃんに愛の告白を切り出した。

対して、彼女の返答はとても哲学的で……？

真面目なんだか、ただ馬鹿正直なのか、とりあえず僕は彼女に気持ち伝えるまで！　なんかキルケゴールもそんなこと言ってたし！

「恋愛を哲学する」——学園哲学ラブコメ、がんばります！

プロローグ 「始まりの告白」

春、である。

命が芽吹き、心地よい風が全てを包み込む。

そして、新学期という鼓動高鳴り心躍るイベントを控えた、そんな季節。

あともう一つ付け加えるなら、春の陽気にアテられてアタマオカシイ人がよく出没する、そういうシーズン。

「はてなちゃん！ 好きだっ！ 付き合って！」

このナンパじみた軽い台詞……僕こと日下部颯太もまた、その変質者の一人のようだ。

はてなと呼ばれた少女——結原果菜は、本を読んでいた顔をこちらに向ける。……それも、極めて無表情で。

軽いノリだったとはいえ、「好きだ」と言われてここまで平静を保ってられる女生徒は、校内では恐らく彼女一人であろう。……だが、むしろそこがいい。皆まで言っな、変態であることは自覚しているさ。

突然発生した告白イベントの成り行きに、教室のあちこちから、

おおっ、という感賞の声が上がる。

今は昼休み。仲良しグループが机を寄り集めて弁当をつついているこのタイミングに、僕は、はてなちゃんへの告白を切り出した。もちろん、注目の的になることは承知のうえである。

普通の女子なら、ここで「えっ、こんな人の見ている前で、こ、困りますっ」といった感じの、気恥ずかしい対応なりしぐさなりが返ってくるのが世の定石ってもんである。

だが、しかし、そこに生まれたのは、そんな見ていて微笑ましいシーンなどではなく、呼吸することすら危ぶまれるような、沈黙。

先に口を開いたのは、はてなちゃんの方だった。

「……あ」

ごくり、と。クラスの誰かが息を飲み干す音が聞こえる。皆、固唾を呑んで、彼女の紡ぎ出す言葉に注目していた。

さあ、恋。間違えた、さあ来い。どんな返事だって受け入れてやるさ……。

「あなたの、私を好きという気持ちは、一体何なの？」

透き通った声が、ひんやりとした温度を保って、教室に響いた。

そう、これが結原果菜という美少女の真髄。愛の告白を受けた際、イエスともノーとも言わず、ただ相手の「自分を好いている」という感情の本質を徹底的に問い詰める。その問いに、的を射た返答ができない男子たちは、自ら彼女から手を引いていく。新聞部の調査によると、高校入学からこの二年間の戦績、二十戦全勝。

イエスと返ってこない時点でフラれること確定の上に、とことん突き詰める根本的な質問に、男子は自分の恋愛観を粉々に粉碎される。彼女への告白は、それこそまさに「玉砕覚悟」でなければいけない。

その、「好き」という曖昧で言葉で上手く表現できない感情に対する容赦のない追求、哲学的な姿勢。もはや、彼女への告白はその「恋愛哲学」に対する説明の答え合わせのようなものと化していた。

結原果菜……通称はてなちゃん、またの名を、人呼んで「難攻不落の哲学要塞」。

その二つ名の所以となる台詞を吐いて、はてなちゃんは僕の瞳をじっ、と見つめる。

今度は、溜め息をつく音が聞こえた。まるで、「今回もダメだったか」と言わんばかりに。

……ふふ、按ずるな。彼女の反応は想定済みさ。これから、君たちには成し得なかった「はてなちゃんルート攻略」の華麗なる喜劇を見せてあげよう……。心して見ているがいいさ、野次馬及び観客どもめっ！

勝負あった、と、教室の誰もが談笑に花を咲かせるため食事に戻ろうとして……。

「何って、好きだから、好きに決まっているだろう？ それ以上でも以下でもないよ」

さらりと言って見せた僕の回答に。

ピクリ、とはてなちゃんの長いまつげが微かに上下するのを、僕は見逃さなかった。

いける……いけるぞ。

おおつ。クラスのあちこちから再び感賞の声が上がる。だが、さっきのとは打って変わって、それは僕の背中に向けられたものだった。

きつと、これが答えだ。だって、そもそも「好き」という気持ちに明確な説明がつくわけない。音楽性や信条と同じく個人差の激しいものであるし、何より言葉にし難い。

今までの挑戦者は、別の言葉で表現できる筈のないその感情を、ムリヤリ説明しようとし過ぎたが故に、自滅していった。

ならば、僕は、言葉に頼らない。

ただひたすらに、この想いをぶつけるまで！

さあどうだ哲学要塞！ 今回こそは、その神秘的なまでに整った美しい顔を、紅潮させてもらうぞ！ 僕や君がブディストだろうと関係なく、我らが父なるジーザスの字を、その綺麗な声で告げてもらおうか！

さあ、さあ、さあつ！

「さあつ！」

あ、やべ、声に出ちまった。だがそんなことは今や枝葉同然さ！
今や、世界は君のイエスを待っている……。

「それじゃ、答えになってない」

「——ッ!？」

な、なんだって……？

今、なんて……？

切ないくらいに透き通り研ぎ澄まされた声は、聞き間違えなんて許さずに、僕の脳ないし心に「絶望」の二文字を突き刺した。

その毒はどんどん広がっていつて、僕に「絶句」や「敗北」、「

挫折」といった単語を連想させていく。

もしかして、もしかしくなくても、ダメだったというのか……？

二年間温め続けてきた、僕の答えが……間違っていたというのか……？

教室がざわめく。最後の希望が潰えて、彼らの間にさまざまな声が錯綜する。あの回答がダメなら……一体、俺たちはどうすれば良いんだ、と。

どよめき始める周囲の喧騒などものともせず、目の前の美少女――いや、哲学要塞は、依然として無表情で、僕を見つめていた。それはまるで、「自分にとってあなたなど、小人の大砲球でしかないのよ」と僕に知らしめるようで……。歯が立たない、僕がそう確信するには、その凜とした佇まいだけで充分に事足りた。

「マイガッ」

僕は、その場に崩れ落ちた。まさか、この言葉を、こういう形で自分が言うことになるなんて……。

ああ、分かったよ。だからニーチェは言ったんだ。

「神は死んだ」ってね。

第一話 「好きの告白」

「はてなちゃん！ 好きだっ！」

昼休み。昨日と同じようなノリで、僕ははてなちゃんこと結原果菜に近づいていった。

はてなちゃんは、鞆から取り出したランチ用のバスケットを開く手を停止させて、僕を見上げる。その顔は、いつもの無表情としては、少々目が見開き過ぎているかもしれない。

「えっ……？」

常時鉄仮面な彼女にしては珍しい、女の子らしい反応だった。

ふむ、さすがに驚くよな。昨日撃沈したはずの艦隊が、再び攻めてきたのだから。まあ、彼女にとっては艦隊というより、申し分クオリティのイカダ程度のものだっただろうけど。

「……あ」

「いや、あのね、今日は告白のつもりじゃないんだ」

騒ぎ始めたクラスメイト達にも分かるよう、僕は大げさに手を振っていつもの台詞をけん制する。最初の一文が「……わ（たしもあなたのコトが好きでした）」だったら止めておくつもりだったけど。

「……？」

きよとん、とした顔で僕を見上げる小動物みたいなはてなちゃん。
ああ、可愛いなあ。

そのちっこい頭を撫で回したいぐらいだ。彼女でもないからボデイタッチは自重するけど。

僕は爽やかな笑顔を崩さないまま、持っている風呂敷に包まれた弁当箱をひよいと持ち上げて見せる。

「もし良かったら、一緒にお弁当食べない？ クラス替えがあつてから、仲良しグループがバラバラになっちゃって。一人で寂しいんだ」

知り合いがいないっていうのは嘘だけど。彼女たちが一緒に弁当をつつく仲ではないことは確かだ。

はてなちゃんは再び目を見開いて、「えっと」と口ごもった後、まるで視線を逸らすように昼食の準備を再開しながら、

「……それは、別に」

「あつ、ほんと？　じゃあ椅子だけ持ってくるねー」

彼女が言い終える前に、僕はほとんど会話を進めてしまう。

曲がりなりにも、好きな女性と一緒に食事ができるのだ。嬉しいに決まってる。

とにかくも、はてなちゃんの机に自分の椅子をスタンバイさせて、僕は昼食を開始した。彼女の席は窓際で、開かれた窓から吹いてくる春風が心地よく、差し込む日差しは心まで温めてくれるように優しい。

「へえ、はてなちゃん、ランチはパン派なんだ。どこかで買ってきてるの？」

はてなちゃんのバスケットの中には、ミニクロワッサンやらミニメロンパンが入っていて、もうそれだけで愛くるしさ百点満点獲得なのに、それらを頼張る彼女の姿なんてのは、もはや悶絶ものだね。

「……全部、手作り」

「まじでっ！　上手いもんだねー」

「……ありがとう」

「ひとつもらってもいい？」

「うん」

「ありがとうー！」

僕ははてなちゃんお手製ミニクロワッサンを一つ取って、口に放り込む。

「ん、んまい！」

「……あ、ありがとう」

次々に褒められて、気恥ずかしいのだろうか。はてなちゃんはそっぽを向いて、もくもくとミニメロンパンを咀嚼し始めた。

にしても、本当に美味しいなあ、このミニクロワッサン。こりや間接キスも計算に入れて、はてなちゃんが食べているミニメロンパンも頂きたいところだね。げへへ。

「……あ、あの」

いかかわしい妄想を膨らませながら、夢心地でミニクロをもぐもぐしていると、不意にはてなちゃんが口火を切った。

「むぐ、なにかな？ メロンパンもくれるの？」

「これは……だめ。じゃ、なくて……その、」

むう。ミニメロンパンはお気に入りのようだ。残念。

「……どうして？」

いや「どうして？」って、何が？ の問題だが、探り込むようなその瞳に、僕は彼女の言いたいことを直感した。……それにしても本当に口下手だなあ、この子。でも、むしろそこが（以下省略）

「どうしてって言われても……」

僕はミニクロをお茶で流し込んで、一息置いた。

「好き、だからだよ。はてなちゃんの求めているような説明はできないけれど、だからって君を諦めきれないんだ。だから、こうして一緒にお弁当つついたりして、ゆっくり気持ちを伝えていこうかなーって思ってたさ」

受け取り用によつては、ストーカー思考である。キモチワルイと言われればそれまでだし、彼女がやめると言えばすぐにやめるつもりだ。だけど……僕はキツパリと彼女に「フラれた」わけじゃない。だからこそ、こういう手段……俗に言う「とりあえず、お友達から」ってやつをやってみること決めたのだ。

我ながら何かむずがゆい台詞だなーと思いつつも、僕は平静を装ってタコさんウインナーを口に含む。

はてなちゃんはというと……ちらり。うん。なかなか驚いている。特別大きなアクションを取っているわけじゃないけど、彼女なりに盛大に目をぱちくりさせていた。長いまつげが相成ってか、この子、けっこう目が大きいな。むう、やはり間違いなく美少女だ。

だがしかし、彼女、要塞と呼ばれるだけあって、驚いているのは分かるとも、その奥の感情は全く読み取れない。嬉しくて驚いているのか、いい迷惑だと思われるのか、表情だけでは分からないので、言葉を失くしている彼女に、僕は訊いてみることにした。

できるだけ、相手の気に障らないよう、下手に出ながら……と。

「えっと……嫌、かな？」

これで僕が童顔だったならば、その効果は計り知れなく絶大だったのだが、生憎と僕のルックスはそっち方面とは違う一途を辿っているのだった。残念なこと極まりない。いつか、はてなちゃんにこんなことを言われてみたいもんだね。その時に、果たして理性を保っていられるかは保障外の話だけど。

「……わ、私は」

僕と目は合わせず、食べかけのミニメロンパンを見つめながら、はてなちゃんは言葉を紡ぎ出す――。

「わ、わからない……」

「うんうんやっぱりそうだね僕も分からないんだ……って、ええ？
ええ？」

予想外の返答に、僕はすっかり箸から卵焼きを机に落としてしまった。
う。

「あ、ごめん。すぐ拭くから」

「わ、私、トイレ！」

三秒ルール適用で僕がそれを拾い上げ、ポケットティッシュを取り出している最中、はてなちゃんは席から立ち上がって、ぱたぱたと駆けて教室から出て行ってしまった。

「え、え、ええー！？ は、はてなちゃん！」

追いかけたところだが、何も女子トイレまでストーキングするほど僕は一線を越えてはいない。彼女が置いていったミニメロンパンを「食べちゃおっかな」と考えながら、おとなしく待っていることにした。メロンパンは食べなかった。

……結局、昼休みが終わるまで、はてなちゃんは帰ってこなくて、

僕は、もしかして彼女のパンが傷んでいたんじゃないかと、内心びくびくしながら午後の授業を受けた。

第一話 「好きの告白」 2

「あ、はてなちゃん。偶然だね。一緒に帰ろう！」

靴箱で待ち伏せをしていると、案の定帰宅部だったはてなちゃんに、自然な流れで遭遇することができた（？）。

彼女はさして迷惑そうなそぶりも見せず、ローファをとんとんと鳴らす。

「……別に、い」

「やったー！ で、はてなちゃんはどっち方面に住んでいるの？」

「……こっち」

彼女が指差した方向は、偶然か運命かいや絶対後者だろう、僕の帰宅ルートと一致した。

「あ、僕もこっちなんだ。やったね」

さりげなく、こちらへの好意を確認する言い回し。

「……」

はてなちゃんは何も言わずに歩き始めた。ああん、いけずう。

「おおっと、けっこう歩くの速いんだね。待ってよー」

彼女のペースに合わせて、ちょっと慣れないスピードで僕も歩き出す。

西日に傾いた陽光が、空に浮かぶ雲や目の前に広がる景色を赤く染めている。ううん、ファンタジック。春の夕暮れ時はいい。紫式部は、夕暮れは秋が良いなんて言っていたけど、春も負けちゃいない。少なくとも、夜明けよりは好きだね。

そんな景色の中を、この子と歩いているなら、その情感はなおさら僕を高揚させる。

「こうやって二人で歩いていると、なんだかカップルみたいだねー」

「……そうね」

お、肯定の反応。ちらつと彼女の表情を覗き見るも、相も変わらずの無表情……ということは、別にどうでもいいってことか。……まあ、白い目で見られたりするよりはずっとマシかな。

それにしても……と、今度はわりと堂々と隣を見してみる。辛うじて見えるのは、はてなちゃんの頭のとっぺん。それは、彼女の身長の高さを表している。この高さ……百五十いっているかどうかぐらいじゃなからうか。

昼休みの時もあったが、こういう風に接していると、「要塞」って言うより、「要塞に守られているお姫様」って感じがする。小さくて、か弱くて、口下手で、何より可愛くて……。

「……なに？」

気付けば長く見つめてしまっていたようで、はてなちゃんは僕を見上げる形で言った。その顔は依然として鉄面皮で、どうやら、「怒っている」ということでもなさそうだ。惜しいことに、喜んではいないだろうと思われ。好感度、未だにブラマイゼロってところかな。

「あ、ごめんごめん。はてなちゃんが可愛すぎて、つい見惚れちゃって」

「……」

気恥ずかしい台詞を爽やかスマイルでやってのけたにも関わらず、はてなちゃんは頬を赤らめるでもなく不謹慎だと咎めるでもなく、ただじつと僕を見つめては、表情を変えないまま視線を前方へと戻した。

取った言動がキザ過ぎたがために、その反応がこうだと、僕はいいよ自分に対する自信を喪失してしまいそうな空しさに駆られる。穴があつたら入りたい、というやつだ。むう、やっぱり彼女は二つ名の通り「難攻不落の哲学要塞」なのかもしれない。

……というか、この子、本格的に色恋沙汰に興味がないんじゃないか？ 本気の本気で、「人を好き」っていう気持ちから分らないんじゃないか、と僕は心底、彼女のこれからを按じてしまう。

これはあくまで僕の個人的な意見だけど……やっぱり、僕らは一人じゃ生きていけないものだ。物質的に考えて、とか精神論で、とかではなくて、ただそう感じるだけ。どんなに「他人との関わりが

なくても生きていける」と考えていても、やっぱり割り切れない気持ち持っていてはあるハズで、それを受け止めてくれるのは、思想や論理ではない他人の心であって、その際に生じてくるものが「友情」や「恋愛」だったりするもので、それらを自分なりに理解することはとても大切なことなのだ。

……と僕は思う。ああ、久しぶりに真面目に脳みそ使ったよ。

「ねえ。はてなちゃん」

僕は、眼前に広がる景色を眺めながら、呟くように言った。

「……なに？」

対するはてなちゃんも、僕の方を向かずに応えた。

斜陽に照らされる空、雲、側の住宅街や遠くに聳えるビル群。そのどれもが紅く滲んでいて、まるで赤いフィルムを通して世界を覗いているようだ。そして、その感情は、色とりどりの虹を見る時に感じる質感とは、何か逆の方へ向かっているようで、青や緑や白なんて色がなくとも、ただこの景色だけで生きていけるような気がして。でもそれは、夏の海や山々、冬の雪と銀世界を見ているときにもそう思うのだろうなと考えては、この鮮やかな景色に対する想いを、誰かに知ってもらいたいと願う自分に辿り着く。

僕は、この景色が「好き」だ。

そして……隣にいる少女のコトだって、同じく「好き」なんだ。

「いつも、この道を一人で帰っているの？」

ちよつとだけ柔らかく、だけどストレートに、彼女のような人にとって、琴線のような部分に触れてみる。

「……」

返事は、一向にこない。それこそが返事なのだろう。

こんなことを聞いて、嫌われたかもしれないと思いながら、僕はちよつと会話の趣旨を逸らす。

「僕さ、この景色が好きなんだ」

「景色……？」

知らないうちに顔を伏せていたはてなちゃんは、俯いていた頭をゆっくりと持ち上げて、紅い世界を眺める。

「……きれい」

「だよな」

ぼつり、と呟いた彼女の言葉に後押しするように、僕は続ける。

「あのね、僕が君を好きだっていう気持ちは、この景色を見て「キレイだな」って感じることに同じだと思うんだ」

「……この、気持ちと？」

はてなちゃんは、上目遣い気味に、僕の目を見た。その瞳はとて

も透き通っていて、まるで純粋な水晶のようだった。……その裏側には、青い影が射しているような感じがしたから。

そう、と僕はにこやかに微笑んで、

「でもね、この景色だって、ただ見ているだけじゃ、何かもつたいたないような気がするんだ。この景色を、誰かに見て欲しい。そして感じた思いを、誰かに知って欲しい。人を好きになることってさ、もしかしたら、そういうことじゃないかな」

自分でも驚くぐらいに、どうやら今日の僕は口達者なようだ。確かに、僕がはてなちゃんに抱いている気持ちは、そういうものなんだろう。けれど、それと同時に思うことは……。

「……でも、私は、分からない」

「はは。……だよねー」

はてなちゃんの言葉に、僕は苦笑いを浮かべては肩を落とした。

そうなのだ。これは、僕の極めて個人的な考えであって、他の人を簡単に納得させられるような説得力なんてない。チャーマーズみたいに哲学的ゾンビがどうか言うつもりはないけれど、結局な話、言葉で真意を伝えることは不可能なのだろう。

それに、こんなパツと見て上辺だけの恋愛観なんて、彼女は聞き飽きているはずだ。いくら言葉に隠した真意が立派だといっても、彼女に対してはお門違いも甚だしいといったところだろうか。

だからこそ僕は、言葉に頼らず気持ちを伝えようとしたわけだけ

ど、それも結果として失敗に終わってしまったわけだし……。

むう……。これは本格的に八方塞だぞ。どうしたものか……。

「……で、でもっ」

あれよこれよと効果の期待できない案ばかり思索し迷走中の僕に、はてなちゃんは——本人なりにはできる限り元気な声を出しているのだろう——慌てたような声で話し始めた。

「こ、この景色がきれいだと思うのは本当……」

そんなデカルトみたいなこと申されましても……。……ん？ いや、待てよ。

「この景色がきれいだと思うのは本当」……ということは、曲がりなりにも、僕の言っていることはそれなりは伝わっているんじゃないか？　じゃあ、なぜ「分からない」……？

「ねえ、はてなちゃん。もしかして君は……って、あれ？」

隣を見ると、彼女がいない。そういえば、さっきの台詞もちよつと遠くから聞こえたような気が……。

「ありゃ」

振り返ってみると、一つ前の交差点で、はてなちゃんは曲がって行ってしまっていた。

戻って追いかけようにも、もう信号は赤に切り替わってしまっ

いて、彼女の背中を追いかける視線は通り過ぎる自動車が遮^{かざ}つていき、その度に彼女の姿は遠のいていく。

「さ、さよならぐらい言ってくればいいのに……っ！」

所詮、彼女にとって僕などその程度の存在なのか。

「はてなちゃんルート攻略」……こ、これは、厳しい旅路になりそうだぜ……！

本日二回目の絶望に、家路につく僕の足取りはおぼつかなかった。

第二話 「気持ちの告白」

昨日の帰宅イベントの結果がどうあれ、とりあえず、はてなちゃんに嫌われてはいないだろうことを確信した僕は、昨日に積極的に彼女にアタックを仕掛けることにした。

「昨日は夕暮れを見たから、今日は夜明けを見てきたんだ」

学校に着いて、靴箱で偶然はてなちゃんと出会えた僕は、もちろん意気高揚としていた。早起きは三文の徳とは言っけれど、これは三文としてはいささか物足りなさ過ぎるね。

教室まで行く廊下での僕の言葉に、「……あ、あの」と彼女は、

「私も、見たの……」

「へ？」

ちらりとこちらを見たり、はてなちゃんは視線をキョロキョロさせながら、

「その……夜明け」

……えっ？

「……ほんと？」

「……ほ、本当よ」

疑って訊いたわけじゃないけど、はてなちゃん慌てた様子で応える。

へえ……これはこれは、いよいよ三両ぐらいの価値じゃないかな。サラリーマンの月収ぐらいは稼げたんじゃないかな。つか、素直に嬉しい。めちゃくちゃ、べらぼうに嬉しい。

「紫式部が言うだけはあるよね。春の曙は」

「で、でも……ちょっと、雲が掛かってた」

確かに、今日の日の出は雲の傘が掛かっていた。

「そうだったね。でも、僕はああいうのも好きだなー。朧月夜みたいで」

「私は……ぼんやりしているのは、好きじゃない」

「ふうん。はてなちゃん的には、くつきりした景色がいいんだね」

「うん。……雲は、あんまり好きじゃないから」

「そっかー」

彼女の性格を考えたら、分かる気がするなあ。

それにしても、楽しいなあ。はてなちゃんとの会話は。

互いに感じた質感は違えども、共通の話題でこうやってお喋りに花を咲かせることができていて、きつと、今、このときだけは同じ気持ちでいられているような錯覚がして、

彼女も「楽しい」と感じてくれていたらいいなっと思う。

「はてなちゃん。ランチに勤しもーぜー」

昼休みの始まりを告げるチャイムがなって、そう言って近づいていくと、はてなちゃんはあらかじめ机の半分のスペースを空けてくれていた。

「ほほーっ?」

「……な、なに?」

無表情でバスケットを開けている彼女を、にやにやと笑いながら覗き見る。

「たぶん……来ると、思っていたから」

わざと目は合わせないで、はてなちゃんは平静を装いつつミニドーナツを頬張る。

「ヘーそーなんだー」にやにや。

「な、なに……っ?」おどおど。

「ん、なんでもないよー。それより今日はドーナツオンリーなんだね。一つもらってもいい?」

「……うん」

はてなちゃんは、自分の食べているものと同じ、チョコチップをまぶしたミニドーナツを一つ取ってくれた。おいおい手渡しだったよ?」

「うーん。美味しいー」

「あ、ありがとう」

ヤバいなあ。にやにやが止まらないなあ。本格的に変態化してきているのかなあ。

まさか、たった一日で、ここまでとは。どうやら、昨日の帰り道での心配なんて必要なかったみたいだ。

これは……いけるんじゃないの?

「はてなちゃん」

ドーナツをお茶で流し込んで、僕は真剣な面持ちではてなちゃんを見つめる。

「……なに？」

「好きだ」

「分からない」

「ええっ！ 即答！？」

しかも「分からない」って……それ、もはや僕に対する決まり文句になってない？

突然いつもの鉄仮面に戻って、はてなちゃんはもくもくと咀嚼を開始した。

「おい、はてなちゃん」

「……」

そして何故か、それっきり彼女は一切口を利いてくれなかった。

だがしかし、無視されたからといって、そう易々と引き下がる僕ではない。

また一緒に帰って、夕暮れの景色について小一時間ほど語り明かしてやる！ と、僕は靴箱にはてなちゃん待ち伏せスタンバイを決め込んでいた。

しばらくして、昨日と同じぐらい時刻に、彼女は靴箱に姿を現した。

「あ、はてなちゃん。偶然だね。一緒に帰ろう！」

前回と一字一句違えない台詞と共に、僕は彼女に爽やかスマイルを送る。自分がキモいなんて思ってたらやっていけないのが世の定石さ。

はてなちゃんは「別にいいけど」といった具合に僕を一瞥し、靴箱からローファを取り出そうとして……そこで動きを止めた。

「……どうしたのー？」

すでに昇降口から出たところにいた僕は、硬直している彼女に呼びかける。だが、返事はなくて、仕方なく僕は彼女の元へ歩いていった。

すぐ近くまで来て、僕は気づいた。はてなちゃんが、自分の靴箱から、靴の代わりに「手紙」を手に取っていたことに。

「……あちゃー。呼び出されちゃったんだね」

彼女がこくりと頷いて、僕はわざとらしく溜め息をついてそれに呼応する。

……夕暮れ時のロマンチックな帰宅イベントは、今回はお預けになっちゃったようだ。

なぜなら、はてなちゃんの方に、優先的なイベントが発生してしまったから。

そう、優先的。

大事な人に大事な気持ちを伝える、とても大事な……はずの、イベント。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0413r/>

はてなの恋愛哲学

2011年10月10日00時58分発行